

令和3年4月5日

第7号

かわら版

# 育種の波動

## 全国新品種育成者の会発行

## 第34回定期総会を開催

育種賞は奥隆善さん  
育種功労賞は渡辺誠一さんが受賞

2月19日、全国新品種育成者の会の第34回定期総会が開催されました。コロナ禍のもと、初のオンライン開催となった総会は、農林水産省知的財産課、農林水産・食品産業技術振興協会、日本花普及センターの参加も得て行われ、広報活動の推進による会員の拡大、種苗制度等の情報収集と会員への周知活動等に取り組む令和3年度の事業計画が採択されました。

続いて行われた表彰式では、世界初のチョコレートコスモスとキバナコスモスの交雑品種を育成し、国内及び北米市場にも輸出している三重県伊賀市の奥隆善さんに育種賞、10品種以上を育成し、7月上旬から1ヶ月半程度であった地域のスマモの出荷期間を4ヶ月程度まで延ばし、雪害に強い仕立て法を開発普及し、新規就農者の受け入れにも努めてきた山形県西村山郡大江町の渡辺誠一さんに育種功労賞が授与されました。

その後、昨年の総会でも講演された竹下大学さんが進行役となり、改正種苗法施行後の育成者権をどのように行使していくべきかについて、全参加者によるフリーディスカッションが行われ、社会に育種への理解を大きく広げていくことが必要との意見等が出されるなど、活発な意見交換が行われました。

## 改正種苗法に関する オンライン説明会のお知らせ

4月20日(火)農林水産省知的財産課にお願いして、改正種苗法の説明会を13時からオンラインで開催することになりました。当会の要望に応えていたての開催でもありますので、多くの皆様の参加をお願いいたします。参加方法については、事前にお伝えいたします。

## 新規加入者紹介

この度、次の3名が当会に加入しましたので、紹介いたします。

大塩 芳弘 ペチュニア、はぼたん等の育種  
兵庫県加西市

樋口 由美子 大豆等の豆類、こんにゃくの育種  
群馬県吾妻郡嬬恋村  
渡辺 誠一 スモモの育種  
山形県西村山郡大江町

渡辺さんは今回育種功労賞を受賞され、大塩さん、樋口さんも共に総会に参加されました。

## わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話し言葉で作成しています

ソフトウェア会社を退職、レース活動後に就農  
トボルプラスの変異株を発見して育種に取り組む

**小関正司：**岐阜市から高山本線で東に約20キロの位置にある賀茂郡坂祝町は、木曽川を挟んで愛知県と接する岐阜県南部の町です。その町で、エボルブルス、カラーリーフ(ヒペリカム、ヒサカキ等)、シクラメン等を生産している小関正司です。父がシクラメンやアザレアなどの鉢物を生産者で、兄が農学部を出て後を継ぐことになっていました。

そのような中で、パソコンのプログラミングが好きだった私は、工業高校に進学し、大手電機メーカーのソフトウェア会社に就職しましたが、その4年後に事情があつて兄に代わり、私が後を継ぐこととなり会社を退職しました。この時の経験は、自園のホームページ作成や新しい営業に生かすことができました。でも、就農したら自



由な時間が無くなるので、埼玉にアパートを借りて筑波サーキットに通い、市販自動車の改造車で行うレースに2年間エントリーしてレース活動をしました。

その後、父から勧められて、国際農業者交流協会のアメリカ派遣研修に参加しました。カリフォルニア州とワシントン州で研修を受けた後、オレゴン州の植木農場での1年間、計2年の研修を受けました。オレゴン州での研修は、雨の日も植木の移動、剪定、草刈などをいました。日常会話+αの英語ができるようになり、この時に様々な木に触れあえたので、現在の木本主体の栽培に結びついたのかもしれないと思っています。自己主張をしつかりしないといけない国なので、その環境も今に生きていると思っています。育成者の会の役員の長谷川君はその時の同期です。(注:この研修先が育成者の会主催での「カリフォルニア・スペリングトライアル2015参加ツアー」の最後に訪問したロサンゼルス

近郊の”サンゲーブル・ナーセリー”で、園主石原さんに、自園と「ハントイン・植物園」をご案内いただいたことをご記憶の方も多いことでしょう)

私は、アメリカ研修を終えて就農した翌年(1999年)、栽培していたエボルブルスの中からまたま発見した変異株がとてもきれいで、「売れるのでは?」と思ったことがきっかけで、育種を始めました。この頃から鉢花業界は下降気味となり、特色のない我が家家の売上げも落ちる一方でしたが、生産規模が小さかったことからすべての商品に触れることができ、出荷の拾い出し作業も私一人で行うため、変異を発見しやすい環境にあったことはラッキーでした。私の育種をするにあたり、多少の本を読んだくらいで知識はほとんどありません。育成品種は、全て栽培中に発見した変異株で、「これを作ったら売れるだろうか?」を考えて、品種として選んでいます。ですから、こういうものを作ろうという狙いはありません。完成した新品種は、自分の力によってではなく、その植物が元々持つ素晴らしい一端だと思っています。私の扱った植物は、世の中にある極一部で、まだまだ多くの植物が出会いを求めていました。今後は、選抜育種ではより多くの植物を扱って細かな観察と営利性の判断を行うとともに、知識をつけ交配育種に挑戦してみたいと思っています。育種の可能性は無限大だと思っています。

育種を始めて約20年で、斑入りのものなど多くの変異種を発見し、2007年1月にヒペリカム「ゴールドフォーム」を登録したのを始め、エボルブルス、ナス、ヒペリカム各1品種の登録を取ることができ、ヒサカキ1品種(審査中)を申請することができました。低木類



エボルブルス「ブルーコーラル」

などは生育期間が長いので、固定できなかった時のダメージは大きいです。そのような中でも、シクラメンなどのメジャー植物と比べてライバルも少なく、特徴を見出しやすいマイナー作物の狙いを定め、営利性も鑑みながらニッチなニーズに対応できる商品につながる育種を心がけています。また、近年の夏は非常に暑く、耐暑性がある商品が望まれます。耐寒性もある程度は必要です。両方を備えたものを作るのは困難ですが、原種がアジアのような低木類はクリアするものも多いため、ヨーロッパやオーストラリアを少し避け、身近な育種元の導入を行おうと思っています。

私が木本類の生産に至ったのは、他人が作らないものを狙った結果です。特に昨今の鉢花業界は不況で、すぐに金になる生育の早い植物が多くつくられていま

す。木本類の生産では営利性を考え、普通植木の業界では15センチ以上のサイズのものが主であるところを、寄せ植えなどを考慮した9センチサイズに仕立てます。生育期間は3本仕立てにして短いもので半年、長い物で3年程です。ハウス等施設利用時の回転が非常に悪いため、生産年数に応じた単価が取れるか、ロス率が低いかを考える必要があります。

主な販売先は、全国各地域の高級園芸店、こだわり園芸店さんになります。量販もホームセンターの旗艦店等が多いです。消費者はその先になるので、中～上級の主に寄せ植えをする方だと思っています。寄せ植えの際は、特に教室を開く際に原価を抑える必要があるので、高価になりがちなカラーリーフは割って使えるよう3本挿しにしています。また、カラーリーフを含む低木類は、売店での回転も低いことから、全国どこの環境でも売店で長く耐えられる(棚持ちの良い)商品づくりを心がけています。

また我が家では、普及を図るために、安価になる競売に出さずに注文で売り切るように必要以上の量を生産せず、長く安定した収益を得られるようにしています。2000年にホームページを開設したりして商品の詳細を紹介するとともに、商品ラベルにQRコードを付け、ホームページに繋がるようにしました。

今後の目標としては、物量によって利益を得るのではなく、どちらかというとパテント料などの収入から利益を得られるように、少しづつ経営方針を変化させていきたいと思っています。育種によって出会うことができる新しい品種、又は既存であっても扱ったことのない植物に触ることはとても楽しいので、これからも育種を継続していくきます。自己満足の育種ではなく、消費者が満足できるような商品に仕上がる事を志しています。

全国新品種育成者の会については、入会した目的は交流もありますが、一番は技術の向上なので、勉強会等技術力アップに繋がる活動をお願いしたいと思います。

## これまでにない品種を目指して

黄皮・縦縞スイカ、オレンジ皮・白肉メロンを育成

**石渡宏：** 東京湾の西の突端、太平洋にせり出した三浦半島は、古くから三浦大根で有名なダイコンやキャベツの産地です。海から数百メートルの場所で、親の代から大根、キャベツ、スイカを生産している石渡宏(いわた)です。私は、子供の頃から市場へも親と一緒に行き、農家を継ぐつもりでした。

45年前までは、地域では各農家が三浦大根の自家採種を行っていましたが、私も20歳位まで自家採種を手伝っていました。信頼できる種苗会社などから購入したものは別だと思いますが、農家などから入手したスイカなどは、種を採って播くと特性がいくつかに分離したものが結構出てきます。日本の野菜は、見た目が同じような品種が多いと思っていましたので、他の人はしてい

ない変わったことが好きな私は、多様な品種を作りたいと育種に興味を持って取り組み始めました。

育種のことを学ぼうと、購入した専門書を読みましたが、理解できませんでした。その後、アナログ放送のNHK3チャンネルでやっていた高校講座、生物の中に遺伝を取り上げた番組があり、理論だけでなく動画での説明もあり、理解が進みました。そして30年前に、現代農業に「お月さま」というスイカが特集されているのを見て、育成者の柳さんが入っている全国新品種育成者の会の記事も出ていたので、入会させてもらつたのです。

長年育種をしてきた中で、一昨年にスイカ、昨年にメロンと2品種を出願することができました。どちらも、外観や大きさなどの多様な品種を作りたいと思って取り組んできた成果だと思っています。

そのうち、スイカ「虎次郎」は、黄色の皮に縦縞が入る品種です。20年前程前に茨城県の直売所でシールに「アメリカ産まれの日本育ち」と書かれた黄皮で赤肉、丸形の小玉スイカを購入しました。そこから採った種を蒔いて翌年栽培すると多種多様に分離したのです。出現した黒皮で黄肉、赤皮で赤肉、黄皮で黄肉などの中から、黄皮で黄肉のセルフを続けたところ、黄皮に縦縞の入る個体を見つけました。それを固定したのが「虎次郎」で、楕円形、黄皮に縦縞があり、重量は約3キログラム、糖度は12度前後の品種です。黄肉の小玉スイカは品種数が少なく、中でも黄皮、黄肉の品種はほとんどなかったので、黄皮、黄肉の物を選抜してきました。ただ、黄皮、黄肉のスイカでは、誰かに作られてしまうと思ったので、縞のあるものを選抜したのです。



虎次郎



コールドゲン

昨年出願したメロン「コールドゲン」は、皮色はオレンジで果肉色は白、表面はスペインメロンに似ている糖度15度前後の品種です。やはり20年ほど前に、子供のお子様ランチのデザートとしてメロンが付いていました。皮つきの状態だったそのメロンを見て、変わった果皮だと思って見ると、種子が3~4粒付いていました。持ち帰って栽培すると、皮色はオレンジ、表面がゴツゴツで果肉色は白、糖度12度前後で食味の硬い果実ができました。分離はなく、3年程栽培しても変化はなかったので、それに手持ちの「ハクツルメロン」を交配し、その後F4当たりで黄皮品種を戻し交配した後、7~8世代で固定して育成したものです。

私は、育種をほとんど自分の趣味と自己満足でやっています。金儲けはありません。遺伝子操作とかいろいろな育種技術も出てきているようですし、今

の若い育種家の人と以前の人たちとはずいぶん違うと思いますが、育種に取り組むにはやはり努力と継続が重要だと思っています。

今は、新型コロナウイルスの影響で外食が減ったりしているところに、暖冬で生育がいいこともあって野菜が過剰となっています。野菜価格がかなり安くなっているので、農家としてはつらい我慢の毎日です。

出願中のスイカ「虎次郎」は、黄皮で縞のある外観から、関西方面を主体に販売できればと思っています。さらに、今後黄皮で赤肉、楕円形で10キロ以上のものをF1品種にしたいです。

## ドラセナから濃赤の枝変わり品種を育成 「スカーレットアイビス」はトリニダード・トバゴの国鳥の名

園部泰宏：茨城県の古河市で、オリーブをメインにドラセナ、ベンジャミンなどの観葉植物を生産している園部泰宏です。私の住む古河市は関東地方のほぼ中央、栃木県、埼玉県に隣接し、群馬県にも近い茨城県の西の端にあります。元は稻や野菜の生産農家でしたが、父の代から観葉植物の生産を始めました。

私は東京農業大学を卒業し、国際農業交流協会のアメリカ研修に参加した後、1999年に24歳で就農しました。研修では、オレゴン州の野菜農家でホップ、カリ



フラワーの収穫作業などの短期研修を行い、同じオレゴン州の100名以上が働く大規模農家で、露地栽培のコニファー等の植え替え、剪定、出荷などの作業を経験しました。

就農し、父と共に観葉植物の生産を始めたその年、ドラセナ「レインボー」の親木の中から他の枝より鮮やかな濃赤の枝を発見しました。これが、就農したばかりの私が、考えてもみなかつた育種の世界に足を踏み入れることになったきっかけです。このドラセナは、1978年に愛知県豊橋市の大十園から購入した2000本の親株の中の一枝でした。花が滅多に咲かないドラセナは、交配もできないのでなかなか新品種が出てきません。私場合も、今回の枝変わりを発見するまでは、購入してから21年が経っていました。枝変わりは比較的多く出るのでですが、そのほとんどは色が抜ける先祖返りです。見つけた濃赤の枝は、何回も挿し木を繰り返して増殖

しましたが、その特性が変わらないことが確認できたので、きちんと登録を取って新品種として売り出そうと思ったのです。2005年11月に品種登録を出願し、品種名には、カリブ海の島国トリニダード・トバゴのトキの仲間の国鳥の名である「スカーレットアイビス」を使わせてもらいました。出願申請は、初めてのことばかりでしたが、担当してくれていた農業普及員さんが協力してくれたことに感謝しております。そのおかげもあり、2008年3月に登録を取ることができました。ドラセナは新品種が出にくい中にあって、このように親品種より鮮やかに赤い枝変わりを見つけて新品種として登録まで取ることができた私は、大変にラッキーだったと思っています。

「スカーレットアイビス」の販売は私の園部園だけを行っていますが、親品種の「レインボー」と比較しても注文を中心に1.2倍～1.5倍位の価格で動いており、2015年の東海鉢物品評会観葉植物の部で日本花き卸売市場協会賞を受けることができました。「スカーレ



スカーレットアイビス

ットアイビス」の販売は、当初は国内でしか考えていませんでした。しかし、未入会であったときに、当会(全国新品種育成者の会)の講演会に誘われて参加し、オステオスペルマムの育種をしている群馬県の関口さんから海外での販売の話を聞いて、海外販売に魅力を感じ入会させていただいたのです。関口さんや会のメンバー、種苗販売者から、海外では生産に手間がかかる物は嫌がられること、ドラセナは従来品種ばかりで新品種が出てこないことを聞き、販売の可能性があると感じました。ドラセナは、手間をかけない栽培ができます。園部園の6寸は底面給水で鉢をセットし、3本の苗を直挿しして大きくなったら、そのまま出荷しています。海外で販売するには、良きパートナーと組むことが必要だと聞いたので、アルストロメリア、八重アマリスなどの育種をしている千葉県の三宅さんから紹介してもらったライジャパンにアメリカとECでの品種登録を頼み、2014年にそれぞれ登録を取ることができました。

本来ならば、販売の目途が経ってから品種登録を取るので、当初は海外販売を考えずに国内で販売していたため、登録出願の期限がぎりぎりとなっていたため、登録の手続きを急ぎました。ただ、その後にアメリカとEUでの試作が始まりましたが、販売に至りませんでした。そのため、PW系列の会社で試作を行い、

順調に進んだのですが、今後は最終の条件交渉の段階でその会社が破綻して話が振出しに戻ってしまいました。ですので、残念ながら今のところ販売に至っていません。それでも、これまでと違うルートからでも販売できる機会が見つかれば、チャレンジしてみたいと思っています。

## 実生で得られた ピンクのシクラメンに救われる

大内幸雄：茨城県の水戸から水郡線で北に約20km、関東地方の最も東北部に位置する常陸太田市の大内幸雄です。北は福島県に接する土地でシクラメン、クレマチス、カーネーション、多肉植物などを生産しています。

私は、明治大学農学部を卒業後、花木、苗木類を生産するアメリカの農家で研修を受け、昭和48年に27歳でシャクナゲなどの花木類の生産を借地で始めました。当時は、道路の整備が進み、街路樹が盛んに植栽されるブームでした。そのような中で仕事を始めた私に、花木生産の厳しい現実が襲いかかってきたのです。苗木が販売できる成木に育つまでの数年間は、収入が得られないことを考えていなかったからです。そこで、再び借金をして土地を借り、短期間で作れる花壇苗の生産に切り替えました。しかし、技術が伴っていなかったので借金を返すだけの収入を得ることはできませんでした。

その頃、市場ではシクラメン、ラン類に人気があったので、身近に感じたシクラメンの栽培を始めました。しかし、栽培が困難な当時のシクラメンの栽培を伝聞だけで始めた私は、厳しい壁に直面しました。何度も挑戦しても失敗の繰り返しでした。ある年は出荷期を迎えたのに花が咲かず、翌年は咲いた花が灰色かび病にかかり、出荷できずに捨てた休耕田が畑に見えるほどでした。そんな中で生き残ったシクラメンを花市場に出すことができず、青果市場に夜そっと運んで白菜のそばに並べることもしました。わずかでも資金が欲しい苦しい日々でした。真夜中にハウスに行って解決策を考えても、答えが見つからずに途方に暮れました。収入がないので、遠足に行く息子に持たせようとした250円の水筒が買えなかったり、近くの市場に運ぼうとしても乗せる車のガソリン代がないこともあります。

この頃、市場の主流は赤色のシクラメンでした。作りたくても、種子を販売してくれなかっただので、私はシクラメンの種子を自家採種していました。私は育種のことを教わったことはありません。自家採種や交配を行う中で、自然と身に付けました。借金がかさみ、どうにもならない状態になっていた年の暮れのことです。自家採取した中から、透明感のあるピンク色のシクラメンが咲いたのを見つけました。売れるかどうかを考えずに、翌年は栽培をそれまでに栽培していたものから、目に留まったそのピンクのシクラメンに切り替え、ピンクの色が引き立つように鉢を素焼き鉢から白いプラスチックの鉢に植えて、

販売しました。それが功を奏したのか、このピンクのシクラメンは市場で大人気となり、思ってもみなかつたこの1度の成功で、我が家家の借金を全て返済することができたのです。

私の作ったピンクのシクラメンを、皆がなぜこんなに  
買ってくれたのかはわかりませんが、自分の力ではどう  
することもできない状態に追い詰められていたからこそ、



## 発見したピンクのシクラメン

透明なピンクのシクラメンに目がとまり、理屈ではわからない植物本来の良さに気づくことができたのかもしれませんと感じています。

私は、交配したものからの実生選抜育種をしていましたが、育種はなぜこのような色や形のものが生じるのかといった疑問から始まります。そんなことに気づいてからは、私にとってハウス全体が育種場になっていました。そのような育種を行った中で実生から育種した小輪で紫赤に濃紅の縁取りのある「プチマイシルバーエッジ」を2008年に登録しました。その後も、新品種の育成は行っていますが、私としては、育種者権を取って我が家のみのオリジナル品種とするのではなく、多くの生産者に作ってもらうことで普及を進めてきました。

育種家は、これまでにない物を生み出そうと夢をもって育種に取り組んでいます。経験と感覚から育種家は自身の理論を組み立てています。育種家同士が語りだすと熱くなり、その熱意、真剣さに押されて、相手の言っていることがはつきりわからないのに、納得して同調する不思議な世界があります。そのように、夢に対して夢中になれる世界が育種の魅力なのだと思っていてます。

鉢物生産を始めて約50年が経ちますが、栽培している種類にほとんど変化はありません。その中で、我が家的生活、4人の子供の教育、土地、家の借金を返済してくれたシクラメンに出会ったことは、本当に幸運だったと思っています。今後も交配育種を続けて多様な品種、個性ある品種を生み出してまいります。

ɸ ɸ

## 活動曆

- 1/8 かわら版「育種の波動」第6号発行  
2/19 役員会(オンライン開催)  
第34回定期総会(オンライン開催)

## 育種賞、育種功勞賞授与

## 総会参加者によるディスカッション

## 「改正種苗法施行後の育種権の行使と活用」

- 3/ 4 全国花き輸出拡大協議会臨時総会（オンライン開催）（山下雄、瀬戸が参加）  
3/16 植物品種等海外流失防止対策コンソーシアム第2回運営委員会（佐藤、林、小原、岩澤が参加）

# വിനോദസഞ്ചാരം മുൻപുള്ള വിവരങ്ങൾ

留言板

 新型コロナウィルスの感染が第4波に入ったとの報道もあり、初めてのオンライン開催となっ第34会総会。でも、総会だけでなく、その後に行われたディスカッションにも多くの皆様が参加し、活発な意見交換を行うことができました。準備に当たった役員の皆様や参加してくれた会員に、改めて感謝を申し上げます。

 この2月、我が会に誕生した3名の新会員の仲間を大歓迎し、共々に喜び合いたいと思います。

大塩さんは、花、樋口さんは豆類とこんにゃく、渡辺さんは果樹と多様な作物の育種に取り組まれておられます。大塩さんと樋口さんは総会の直前の入会、渡辺さんは育種功労賞を受賞されるということで、3人の新入会者がそろってオンライン総会に出席され、皆様の紹介できたこともこれまでになかったことです。

⑥ 4月1日から改正種苗法の一部が施行となりましたが、この法律に関する農林水産省が作成したQ&Aについて、ホームページに掲載しましたので、参考に活用されますようお願いいたします。

今号では、育種対象がシクラメンの前副会長の大内さん、スイカ・メロンの石渡さん、観葉植物のドラセナの園部さん、花木の小関さんと異なる4人の育種の取り組みを紹介しましたが、いかがでしょうか。栽培がうまくいかず苦しんでいた大内さんが、発見した1つの新品種によって事態を解決した体験には、品種が持っている大きなを感じ、カーレース活動後に就農したユニークな小関さん歩みも印象に残るものでした。今後も、多くの皆さんの育種の取り組みを紹介してまいります。ご協力をお願いいたします。

問い合わせ先 事務局 岩澤 弘道

090-4059-1096

Fax 03-3691-2818

Eメール iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com